



2022年6月9日放送

緩和ケアにおける多職種連携のスピリチュアルケアについて

東北大学病院 緩和医療科
金田 諱晃

—はじめに—

本日は「緩和ケアにおける多職種連携のスピリチュアルケアについて」というテーマを頂きましたので、緩和ケア病棟で臨床宗教師として患者さんとそのご家族、またスタッフと関わり合いを持たせて頂いているという立場からお話をさせて頂きたいと思います。

—臨床宗教師について—

まず始めに、「臨床宗教師」についてご存知ない方もいらっしゃるかと思いますので、簡単にご紹介させていただきます。臨床宗教師は、被災地や医療機関、福祉施設、刑務所や地域社会など公共空間で心のケアを提供する宗教者です。臨床宗教師という言葉は、欧米のチャプレンに対応する日本語として生まれました。

その活動においては、布教・伝道、営利を目的とするのではなく、相手の価値観を尊重しながら、宗教者としての経験をいかして、苦悩や悲嘆を抱える方々に寄り添います。仏教、キリスト教、神道など、さまざまな信仰をもつ宗教者が協力しています。

臨床宗教師は、2011年の東日本大震災を契機に、東北大学で養成が始まり、龍谷大学、鶴見大学、高野山大学、武蔵野大学、種智院大学、大正大学、愛知学院大学、上智大学、日本スピリチュアルケアワーカー協会等の諸大学機関もこれに取り組んでいます。また、一般社団法人日本臨床宗教師会による資格認定が行われています。

臨床宗教師は、その活動に際して「臨床宗教師倫理綱領」、「臨床宗教師倫理規約（ガイドライン）および解説」を遵守することが義務付けられており、この中には先ほどご説明させて頂いた布教、伝道をせず、相手の価値観を尊重するという内容も含まれています。また、多くの活動現場では、さまざまな職種との連携、協働が求められる為、多職種連携をしていく上で必要な倫理についての内容もあります。

—全人的苦痛と多職種連携—

さて、医療や福祉の現場においては、「多職種連携」が大切であることが広く理解されています。なぜ多職種連携が大切であるのか。その理由の一つに、人間の苦痛を様々な痛みの総合として捉える視点、すなわち「全人的苦痛（トータルペイン）」が挙げられます。全人的苦痛は、身体的苦痛、精神的苦痛、社会的苦痛、そしてスピリチュアルペインという4つの要素に分類して捉えられています。このような多様な苦痛のケアの必要に答える為に、さまざまな職種や立場にある人同士の協力が必要とされます。

—スピリチュアルペインについて—

この4つの苦痛の分類の中で、最後に述べたスピリチュアルペインについては、あまり耳なじみのない方もいらっしゃるかもしれません。もしかすると怪しげな、疑わしいものといった印象を抱く方もいらっしゃるかもしれませんが、医療、特に緩和ケアなどの分野においては、患者のケアに携わる上で、とても大切な要素として捉えられています。先ほどの全人的苦痛について、最初に言及したとされるのはイギリスにおいてセントクリストファーホスピスを設立し、近代ホスピス運動の母とも呼ばれるシシリー・ソンドースと言われているのですが、彼女は、全人的苦痛について解説する中で、スピリチュアルペインについて次のように言及しています。

「人生はもうじき終わりそうだという理解は、大切なものを優先し、真実であり価値のあると考えられることを達成したいという願望を刺激するだろう。そして、できはしない、する価値もないという気持ちを引きおこすだろう。そうなれば、今起きていることの不公正さや過去のでき事の多くにつらい怒りを感じ、結局無意味というみじめな気持ちが湧く。ここにこそ、スピリチュアルペインの本質があると私は信じる」

皆さまは、このことをご自身の身に引き寄せて、どのように感じ、受けとめるでしょうか。ここにはソンドース自身が出会ってきた多くの患者から学んだ、深い人間理解があるでしょうし、人によっての理解の仕方がさまざまかもしれませんが、ここでは、私なりの理解を申し上げたいと思います。

まず、私たちは身体だけが健康なだけではなく、「生きがい」や「やりがい」を得ることで、日々の充実感を得て、生き活きと過ごすことができているように思います。それらは自分自身の能力向上を目指すものや、あるいは誰かの為に役立つということが原動力になっているかもしれません。

また、この先ずっと人生が続いていくことが約束されていると信じることで、安心して一か月後、数年後、あるいは数十年後の目標や予定を立てて、それに向かって努力をしたり、楽しみを見出して生きることができているように思います。そのような中では、「死」とい

う「生」の終わりを想像することは、あまりないのかもしれませんが。

しかし、自分に残された時間に限りがあることを予感、あるいは自覚せざるを得ない状況になると、どうでしょうか。数十年後は勿論、状況によっては明日の約束をすることもままならないかもしれません。

また老いや病、あるいは死に逝く過程においては、身体が自由が利かなくなり、これまで当たり前、思い通りにできていたことができなくなり「生きがい」や「やりがい」を見出しにくくなるかもしれません。また、周囲のお世話を受けて生きなければならない自分を受け入れられず、そこに嘆きや悲しみ、無意味感や無力感など、一言では表しきれないさまざまな気持ちがおこってくるかもしれません。

そのような中で、ソンドースがおっしゃっているような、なぜ私が病気になって死んでいかなければならないかという不条理に対する怒りや、残された時間をどう生きればいいのかという虚無感や諦め、またこれまでの人生を振り返る中での後悔や心残り、また死の恐怖や、死後の問題に悩まされるかもしれません。このようなスピリチュアルペインについての関心は、当初はターミナルケアの現場から発信され、現在では、人間は終末期に限らず、人生におけるさまざまな場面でこのような悩みに直面しうることと、そのケアの必要性が強調されるようになってきています。

—スピリチュアルケアと傾聴—

さて、本日のテーマにはスピリチュアルペインへのケアとしての、スピリチュアルケアが挙げられています。スピリチュアルケアについて考えたり、取り組もうとする際、あえて申し上げるまでなことではないと思いますが、私たちは、誰しものが老いや病、そして死の苦悩に直面しうる存在で、先ほど申し上げたようなさまざまな苦しみや辛さを、互いに持ちうるんだということを理解することが大切ではないかと思えます。そして、それぞれの中に沸きおこってくる、目の前で悩む人に対する思いやりや愛情、慈しみの心がなによりも大切と思えます。それを踏まえた上で、次にスピリチュアルケアにおける「傾聴」の大切さについてお話しさせていただきます。

傾聴とは、情報収集を目的にしたインタビューのように、無理に話を聞き出す、引き出すということではありません。目の前で悩む方が話したいことや、お気持ちに「聴き手」がしっかりと「向き合うこと」「受けとめること」が大切と思えます。その為には、聴き手自身が相手に向き合う姿勢や態度を常に省みることが必要です。

例えば、老いや病、死に関する重苦しい話を吐露された時、励ましたい、前向きになってもらいたいといった思いから、「そんなに悩まないで」とか「悩んだって仕方がない」といった言葉をお伝えした時、それによって励まされ力づけられる人がいるかもしれませんが、一方でその問題についてもっと一緒に向き合って欲しかった、聴いて欲しかったという方にとっては、話を避けられた、向き合ってもらえなかったという風に感じられるかもしれません。

実はこのような励ましの想いは、辛い話を聴くに堪えられない自分自身の為に発せられた言葉かもしれません。

そして、必ずしも問題の解決を目指すことばかりではないことを、聴き手が受け入れることも大切でしょう。先ほどスピリチュアルペインについてお話しさせて頂いた中であつたような悩みは、その方の状況に応じた対応によって解決できることもあるかもしれませんが、解決できることばかりではないことは、お一人お一人の人生経験からも想像に難くないと思います。例えば、自分が亡くなった後、残された家族のことが気がかりで仕様がないう方に、絶対的な確信をもって頂くことはとても難しいことのように思います。そのような悩みをおっしゃる方がいる時、もしかすると、完全な解決ができないことを一番わかっているのは、本人である場合も少なくないかもしれません。そうした時には、やはり問題の解決を目指すだけでなく、辛い気持ちや思い通りにならない苦しみのものを、「聴き手」がしっかりと「向き合うこと」、「受けとめること」が大切です。

このように解決ができないことへの苛立ちや、無力感に堪えられず、悩む人に向き合うことから逃げ出したくなる姿勢が、自分自身の傾聴の態度に表れてしまうかもしれません。繰り返しになりますが、聴き手になりうる人は、自分自身の姿勢や態度、そこから発せられた言葉が、本当に相手の為なのか、自分の為なのかを常に振り返ることも大切でしょう。

ースピリチュアルケアの多職種連携ー

このような傾聴的な関わりは、悩む人自身が話したいと思うタイミングや、話したいと思う相手、安心して話せる場所や機会を大切にすることが必要です。私たちは普段の生活の中でも、自分と相手との関係性によって、悩みを含め話す内容を選んでいることが普通ではないでしょうか。特に、このようなスピリチュアルペインに関わる内容については、安心して話せる人や、話をそらさずに聞き、流さず、受けとめてくれる人に話をしようと思うものかもしれません。そのことを担うのは心のケアの専門家だけではありません。家族や身近な友人、そして、本日ラジオをお聴きになっている薬剤師の皆さんかもしれません。多職種連携の中で、スピリチュアルケアや傾聴的関わりを大切にする上で、このことも心に留めておくことが大切でしょう。

最後に、本当の意味で相手の悩みや苦しみを知り、共感することは難しいことです。悩むその人に代わって誰かがその悩みを背負うこともできません。しかし、繰り返しになりますが、愛情や慈しみの心を大切に、及ばずながらの姿勢を心掛けて向き合うということをお願いしたいと思います。